

社会人大学生が入学時に必要とするサポートについての調査

On support adult students need to have at the first year in online college courses

石川奈保子^{*1}, 向後千春^{*2}, 富永敦子^{*3}

Naoko ISHIKAWA^{*1}, Chiharu KOGO^{*2}, Atsuko TOMINAGA^{*3}

^{*1} 早稲田大学大学院人間科学研究科

^{*1} Graduate School of Human Sciences, Waseda University

^{*2} 早稲田大学人間科学学術院

^{*2} Faculty of Human Sciences, Waseda University

^{*3} 早稲田大学ライティング・センター

^{*3} Writing Center, Waseda University

n-ishikawa@suou.waseda.jp

あらまし：本研究では，社会人大学生が入学時に必要とするサポートの内容について明らかにすることを目的とし調査を行った．その結果，社会人大学生は入学時，レポート作成などの学習活動に対して不安を感じていることが示された．このことから，学び方や学習スキルに関する知識の提示がサポートとして求められていることが示唆された．

キーワード：eラーニング，社会人大学生，学生サポート，入学時不安，大学生活不安，学習スキル

1. はじめに

eラーニングの広まりによって，社会人大学生が増加しつつある．しかし，仕事や家庭を持っている社会人大学生が大学での学習を始めるにあたっては，さまざまな不安要素があると考えられる．たとえば，学習のための環境，仕事や家庭との両立，パソコンの技能や学習スキル，eラーニングに特有なオンラインコミュニケーションのスキルなどである．

若年層の通学制大学生の大学生活に関する不安を明らかにするために，藤井(1998)は，大学生活不安尺度を作成した⁽¹⁾．その尺度は，(1)日常生活不安（授業，留年，卒業，サークル，先生などに関する一般的な不安），(2)評価不安（テスト，成績，卒業研究などの評価に関する不安），(3)大学不適應（憂鬱，転部，退学など不適應の兆候）の3因子から構成された．しかしながら，この尺度は，若年層の通学制大学生を想定したもので，eラーニング社会人大学生にあてはめることを考えると，その一部の尺度項目は利用できるとしても，さらに項目の要素を追加する必要がある．

社会人が大学に入って学ぶ機会の多いアメリカでは，特に成人学習者に向けてのサポートを行っている．たとえば，Chapman-Ashleyら(1989)は，成人学生のためのガイドブックを作っている⁽²⁾．その内容は，(1)学び方を学ぶ，(2)自己主導的学習者になる，(3)ストレスと時間のマネジメント，(4)学習スキルを習得する，(5)数学の不安への対処，(6)図書館の使い方，などである．社会人大学生の場合は，動機づけは高い一方で，学習スキルや時間のマネジメントに不

安要素が高いことが予測されるため，このガイドブックにおいても，そうしたところに力点を置いて書かれていることがわかる．こうした観点に加えて，eラーニングに特有なオンラインコミュニケーション技能についてのサポートも必要になってくる．

本研究では，eラーニングコースの社会人大学生が入学後に持つであろうさまざまな不安を軽減するためのサポートについて考えるための予備的な調査を行った．その調査により，特に，社会人大学生が入学時に必要とするサポートの内容について明らかにすることを目的とした．

2. 方法

私立大学の通信教育課程の在学生825人を対象に調査を行った．質問紙は，2011年5月9日から5月29日にかけて，大学のLMSのアンケート機能を使って実施した．学習環境や，仕事との両立についてたずねた15項目について，「1.まったく自信がない」から「7.十分自信がある」の7件法によって回答してもらった．見積もられた回答時間は約7分であった．

3. 結果

対象者825人に対して，149人から回答を得た（回収率18.1%）．回答未記入のデータを除外した分析対象データは，140人（男性59人，女性81人）分であった．入学年度による人数はそれぞれ，2011年度82人，2010年度19人，2009年度15人，2008年度17人，2007年度以前7人であった．

回答データについてG-P分析およびI-T相関による項目分析を行ったところ，不適切な質問項目はな

表1 因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

	因子1 学習活動	因子2 コミュニケーション	因子3 操作技能	因子4 周りの理解
5.テストで良い点を取ること	.956	-.043	-.061	.048
6.レポートをうまく書くこと	.840	.061	-.041	-.065
4.授業で出された課題をこなすこと	.809	.052	.071	.012
3.授業の内容を理解すること	.642	.065	.265	-.077
15.自分の目的にあったゼミを選んで所属すること（所属できたこと）	.522	-.026	-.012	.066
8.教育コーチとうまくコミュニケーションがとれること	.079	.972	-.096	-.011
7.先生とうまくコミュニケーションがとれること	.102	.889	.021	-.045
9.ほかの学生とうまくコミュニケーションがとれること	-.112	.880	.068	.118
2.コースナビ（オンデマンド授業の視聴やBBSへの書き込みなど）がうまく操作できること	.047	-.028	.962	.007
1.パソコンの操作が上手くできること	.026	.007	.736	.031
11.大学で勉強することを自分の職場の人たちに理解してもらうこと	.108	-.047	-.022	.891
10.大学で勉強することを自分の家族に理解してもらうこと	-.107	.131	.062	.480

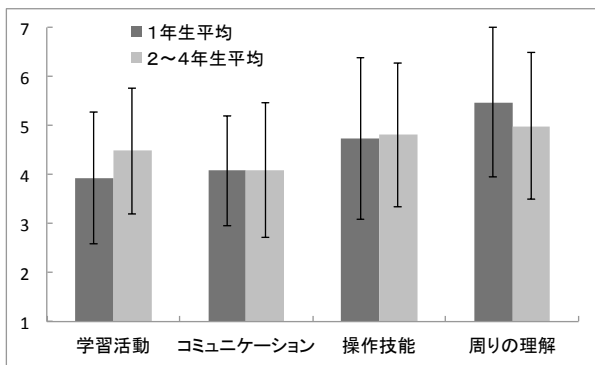


図1 各因子の素点の平均および標準偏差

かった。そこで、15項目について因子分析を行った（最尤法，プロマックス回転）。その結果，スクリープロットの急落から4因子解を採用した。これによる分散の説明率は63.56%であった。因子数を4に指定し，負荷量が.40未満の項目，および複数因子で負荷量が.35以上の多重負荷の項目を除外しながら繰り返し因子分析を行ったところ，4因子12項目が得られた（表1）。4因子による分散の説明率は72.11%， α 係数は.902であった。各因子の α 係数は，因子1が.889，因子2が.952，因子3が.857，因子4が.614であった。因子1は，テストやレポート，授業内容の理解などの項目から構成されていたので「学習活動」と名づけた。因子2は，コーチや先生，他の学生とのコミュニケーションの項目から構成されていたので「コミュニケーション」と名づけた。因子3は，LMSやパソコンの操作の項目から構成されていたので「操作技能」と名づけた。因子4は，職場の人や家族への理解の項目から構成されていたので「周りの理解」と名づけた。

入学直後の1年生と入学して1年以上経験している2～4年生の間に，各因子における自信の度合いにどのような違いがあるかを検討するために，各因子に属する項目の素点の平均を求めた（図1）。なお，ここでは，5年生以上の回答は回答者数が少ないので，分析から除外した。その結果，因子1「学習活動」で，2年生以降で有意に自信が高かった（ $t(131)=2.95, p<.01$ ）。また，因子4「周りの理解」で，2年生以上で有意に自信が低かった（ $t(131)=2.28, p<.05$ ）。因子2「コミュニケーション」および因子3「操作技能」では有意な差は見られなかった。

4. 考察

1年生は2～4年生と比べて学習活動に対して不安を感じていることが示された。これは，入学直後は講義や課題の様子がわからないので，自分にこなす能力や時間があるか計りかねるためであると考えられる。その一方で，周りの理解に対する不安は，1年生の方が小さいことが示された。入学直後の時点では周りの理解を得た状態にあるが，学年が進むにつれて周りの理解が得られなくなる学生もいる可能性が示唆された。

参考文献

- (1) 藤井義久: "大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討", 心理学研究, 68(6), 441-448 (1998)
- (2) Chapman-Ashley, Lee, et al.: "Returning to College: A Resource and Planning Guide for CSUH Adult Students", California State Univ., Hayward. (1989)

（付記）本研究は，平成22～26年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)22500942「成人教育学の視点に基づいた生涯学習のためのeラーニングの構築と実践」による支援を受けています。